薬　　剤　　部

薬剤部

薬剤部長　稲生　和彦

今年度は、一般薬剤師から主任薬剤師への振替により、部内の中心業務である調剤、注射、抗がん剤調製に各１名の主任を配置して効率的な業務運営を行うことができた。このことは、薬剤管理指導料算定件数や一週間当たりの平均病棟薬剤業務時間の増加などにその具体的な効果が表れている。また、病院機能の強化としての取り組みは、抗菌薬適正使用支援チーム(AST)及び入院サポートチームへの参画、回復期リハビリテーション病棟における病棟業務など、チーム医療への積極的な関わりによる業務拡大を行った。

[抗菌薬適正使用支援チーム(AST)への参画]

平成30年度診療報酬改定で新設された抗菌薬適正使用支援加算の要件として設置されたチームでありICTと兼任で参画しているが、カンファレンス対象患者の選定及びその後のフォローなど薬剤師の関わりが多いため担当する薬剤師を従来の１名から２名に増やして業務を実施している。

[入院サポートチームへの参画]

入院が決定した患者に対して各医療専門職が入院前から退院後まで関わることで、患者が安心して治療を受けられることを目的としたチームを結成し、９月から呼吸器外科の手術予定患者に対する支援を開始した。薬剤部では患者の服薬状況やアレルギーの確認、手術前中止薬の中止時期の確認・指導をオンコール体制で行っている。

[回復期リハビリテーション病棟における病棟業務]

病院機能評価（リハビリテーション機能）受審に向け、６月から薬剤師１名を配置し、持参薬、服薬指導、カンファレンスへの参加などの病棟業務を開始した。当該病棟は病棟薬剤業務実施加算の対象外であり薬剤管理指導料も包括となっているが、医師、看護師等から薬剤師の配置の要望があるため機能評価受審後も同様の関わりを継続中である。

[抗がん剤無菌調製業務]

２名のがん認定薬剤師を中心に業務を展開している。今年度は無菌調製業務担当者の育成、抗がん剤暴露防止対策として揮発性のある抗がん剤調製時の閉鎖式調製器具の導入を行った。レジメンについては従来の医師による作成から薬剤師が中心となって作成すること、また、患者待ち時間の短縮のために調製後の抗がん剤の搬送時間等の運用マニュアルを改訂するなど、業務の円滑化に努めている。

[医薬品管理業務]

後発医薬品への切替えは継続的に実施しており、2018年度は計31品目の変更により数量ベースで89.6%、医薬品費削減金額は約1,330万円（納入価）で昨年度と同様に病院経営に貢献できている。また、2017年度から適正な在庫管理の一環として期限切れ医薬品の削減に努めており、今年度は2016年度と比較して約76.9万円削減することができた。

[疑義照会簡素化プロトコール]

院外処方箋に関する保険薬局からの疑義照会については、従来から薬剤部が一元的に受付を行い処方医に確認し回答していたが、このうち調剤上の形式的な照会については診療部と薬剤部により事前に作成・合意されたプロトコール（疑義照会簡素化プロトコール）を作成し、処方医への照会を省略して薬剤部において回答を行うことで医師の業務負担軽減及び保険薬局における患者待ち時間の短縮を図った。

次年度の展望としては、入院サポートセンターの対象患者の拡大に対応した体制整備、がん化学療法における従前のレジメンの見直し、疑義照会簡素化プロトコールの保険薬局への拡大及び保険薬局からの患者情報の収集を含めた連携の強化、PBPM（プロトコルに基づく薬物治療管理）の推進等により、院内外における更なる業務展開を図りたい。

また、近年の医療の高度化・複雑化により、チーム医療における薬剤師の役割は益々重要となっており、専門性の高い薬剤師の育成は重要となっている。今後も各領域における認定薬剤師の更なる取得、各種学会での発表や論文投稿を奨励するとともにそのための環境整備を充実していきたいと考える。

【薬剤部スタッフ】

薬剤部長	稲生　和彦			
副薬剤部長	森　達也			
調剤主任	五十嵐　昌子			
治験主任	後藤　友美子			
製剤主任	倉田　綾子			
薬務主任	植木　大介			
薬 剤 師	古澤　由美子	駒木根　幸恵	川澄　夏希	荒木　佑佳
	岩崎　景子	相澤　俊介	橋本　研甫	大谷　恵里奈
	小林　沙織	池上　千尋	西川　由夏	立川　美咲子
	鈴木　恭彦	橋本　若奈		
薬剤助手	飛彈　久美子			

【各種認定取得状況】

がん薬物療法認定薬剤師	植木　大介、 駒木根　幸恵
外来がん治療認定薬剤師	植木　大介
栄養サポートチーム（NST）専門療法士	森　達也、 植木　大介、 古澤　由美子、 駒木根　幸恵
日本糖尿病療養指導士	後藤　友美子、 古澤　由美子、 岩崎　景子
認定実務実習指導薬剤師	稲生　和彦、 倉田　綾子、 植木　大介、 駒木根　幸恵、 川澄　夏希
抗酸菌症エキスパート	橋本　研甫
臨床薬理学会認定ＣＲＣ	池上　千尋
日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師	稲生　和彦、 倉田　綾子、 植木　大介、 古澤　由美子、 岩崎　景子、 池上　千尋、 駒木根　幸恵、 大谷　恵里奈

【薬剤業務実績】

項　目		27年度	28年度	29年度	30年度
注射処方箋	入院(枚)	84,591	82,239	78,171	74,836
	外来(枚)	12,179	9,928	8,209	7,887
処方箋枚数	入院(枚)	75,286	74,089	72,391	73,535
	外来院内(枚)	5,867	6,246	5,566	5,292
	外来院外(枚)	68,272	67,127	66,168	67,662
院外処方箋発行率		92.1%	91.5%	92.2%	92.7%
薬剤管理指導料1(ハイリスク薬管理)		6,644	5,093	6,083	6,385
薬剤管理指導料2(1以外)		8,726	8,354	7,466	8,605
薬剤管理指導料の合計		15,370	13,447	13,549	14,990
薬剤師1人当請求数(月)		67.4	62.3	62.7	65.7
麻薬管理指導加算		410	348	402	422
退院時薬剤情報管理指導料		2,908	2,264	2,314	2,248
薬剤情報提供料		4,522	4,774	4,249	3,874
病棟薬剤業務	病棟薬剤業務実施加算	19,009	19,296	18,488	19,478
	持参薬確認数	5,038	5,462	4,986	5,027
	処方支援数	672	344	396	1,021
	一週間当たりの平均病棟薬剤業務時間(h)	25.55	24.27	25.71	24.05
外来化学療法加算1		811	826	790	968
無菌製剤処理料1(抗がん剤無菌調製)		4,321	3,881	3,603	3,643
内訳	入院	3,222	2,786	2,561	2,455
	外来	1,099	1,095	1,042	1,188
がん患者指導管理料ハ※(薬剤師実施分)				17	213
院内製剤加算		95	117	54	17
外来患者服薬指導件数		821	857	804	941
後発医薬品割合(数量ベース)		75.8%	75.5%	88.6%	89.6%
プレアボイド報告数		7	0	20	26
薬学生受入	薬学実務実習(人数)	12	12	15	13
	長期実習(人数)	1	0	0	0

※　がん患者指導管理料ハは平成30年2月から実施

【業績】

○薬事新報（薬事新報社） 2018.4.5　稲生 和彦
　国立病院機構東京病院薬剤部の現状について
○第93回日本結核病学会 2018.6.23　橋本 研甫
　抗酸菌治療薬における急速減感作療法の安全性
○第16回日本臨床腫瘍学会学術大会 2018.7.20　植木 大介
　発熱性好中球減少症に対するペグフィルグラスチムの二次予防効果の検討
○第72回国立病院総合医学会 2018.11.9　植木 大介
　病棟薬剤業務のスキルアップを目指したプレアボイド報告体制整備へ向けた検討
○第59回日本肺癌学会学術集会 2018.12.1　大谷 恵里奈
　がん患者に対する分子標的治療・免疫治療支援チーム介入効果の検討
○Lung Cancer Team Meating in North Area 2019.1.31　大谷 恵里奈
　当院の化学療法の副作用対応について
○第83回関信地区国立病院薬剤師会例会 2019.2.16　橋本 若奈
　入院サポートチームへの参画　～患者の安全な周術期管理を目指して～
○第5回多摩肺癌チーム医療勉強会 2019.3.1　大谷 恵里奈
　がん治療に対するチームでの取り組み
○日本臨床腫瘍薬学会学術大会2019 2019.3.23　植木 大介
　カルフィルゾミブで透析を要する腎障害を来たした多発性骨髄腫の1症例